

たゞ一つの自由を

男は女より一枚上

私は私が今、男は其體力に於ても其智力に於ても、女よりも一枚上であると斷言することに就いて、人と争ふことを避けたい。若し、私のこの言葉に對して怒られる女性があつたならば、私はその人の前に、ともかくも私一人は男の力をより多く認めなければならぬ者であることを告白して退かうと思ふ。従つて無定見に私は男性を罵倒したくない。又、無闇に男を罵倒し冷笑し得る人の勇氣とその賢ささとを羨まうとも思はない。

けれどそれは、男が皆必ずしも女より優れて居るといふことではない積りである。人格の下劣な男、無能な男、薄っぺらな男、さういふさまざま種類に属する憐むべき男が、(こゝで蔑むといふ言葉は慎みたい)女にもあると同時に數多くあるといふことを否まうとするのではない。けれどもそれらの男はすべて私の對象の外である。私は私の周圍に、十分に尊敬し得べき男性を見出ことに苦しまない幸福を有してゐる。

男に劣る處に女の力が在る

又私は徒らに女性を男性の下に置いて喜んで居る者ではない。男は男である。女は女である。男には男の生きる道があり、女には女の生きる道がある。男は男の力を有ち、女は女の力を有つて居る。男よりも女がその力量の劣るところに女の力がある。といふと奇言を娛むやうに聞えるかは知れないけれども、私は今自分の思つてることを言ひ現はす適當な言葉を知らない。私はたゞ男と女の優劣を価値の問題にしたいと思つてゐる。

私の觀察は狭く、私の智識は淺く、世間一般の男に對してどんな考へを抱いて居るかを自ら問ふたこともなかつた。私はたゞあるがまゝにあつて來た。かくなればならぬといふ眼を有つて男性を見て來なかつた。従つてそこに希望も要求もない。

理智を絶した要求

けれども私に直接の交渉ある者——それは父でも兄弟でも或は夫でも友人でもには、あゝあつて欲しいとか、かうして欲しいとかいふ希望はあり得べきことである。しかしそれは個人々々に就いてゝあるから總括して私は斯く斯くの事を男に要求するといふ事には

ならない。

最も近く密接に自分に對立して居る者は、戀人、乃至は夫である。けれども私はそれが男性を代表し、従つてそれに抱く要求が、男性一般に通じる要求であるとはしたくない。夫に對する妻の要求は理智を絶してゐる。我儘である、勝手である、實現されない要求である。尤もかういふ事を云ふのは、私極世間並みの平凡な女であるからである。私の總ての言葉は、些も豪くない、そして磨かれてない一人の女から出立して居る。

私はこれぞといふ要求を持つて夫に對して居ない。それは要求ともいはづいふべきものがないこともないが、それは際限のないもので、又不條理なことばかりである。右を望んで右が得られたら又左をと望むやうなものである。

體は頑健でない程度に強くあつて欲しい。何故といつて夫に病まれる位心細いやなものはないからである。悪いことをしないで金もうけが上手であるならば猶更結構であるが、月々のお小遣ひに不自由しない位であるならばいゝ。お酒も煙草も少しづゝいけて、甘えさせて貰へて、それで時々ぴりつとした小言をいつて欲しい。情深くてありながら情に負けないで、時によつては覆すことの出来ない強い強い意志を示す人、あらゆる私の我儘を許しながら、ぎゆうの音も出ないほどその我儘をとつちめて呉れる人であつて欲しい。遊び好きで勉強家で、精神的な人で……といふやうに、一々擧げたら際限がない。つまり弱くて強かれといふやうに私の要求は矛盾してゐるのである。

しかしそれらは要求といふよりも慾望であつた。理智を絶してゐながらしかも理智によつて制へることの出来るものであつた。

私はたゞ一つの自由を求めて居る。不眞面目でない意味の自由を、放縦と誤られない自由を、愛に根ざした自由を求めて居る。

底本…「水野仙子全集」第五卷

初出…「新婦人」大正三年三月

テキスト入力…小林 徹

公開…平成三十年二月二十五日

リンク…[水野仙子ホームページ](#)